



僻地教育研究施設の新たな展開に向けて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 谷本, 一之 メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9640

僻地教育研究施設の新たな展開に向けて

谷 本 一 之

アラスカ大学・教育学部の W. Parrett 教授の研究室の壁に、北海道の学校の校長先生が書いた色紙が飾られている。文面に曰く「教育の原点は僻地教育にあり」。多分に精神主義的意味合いをこめてしばしば語られるこの言葉を、Parrett 教授がどう受け取っているのかをまだきちんと聞いてはいないが、教授がこの言葉に深い共感を抱いていることだけは、教授の過去10年程のアラスカと北海道での研究活動の軌跡からうかがうことが出来る。私もすこしお手伝いした Parrett 教授と映像人類学者の L. Kamerling 研究員（アラスカ大学博物館）が数年に亘り実施してきたプロジェクト「北海道の小規模校一南富良野，金山の学校と地域」は、地域研究を基本に据えた小規模校教育のモデル的研究というだけではなく、教育を通じてのすぐれた日本理解のための研究として、その成果が間もなく提示されようとしている。アラスカの僻地教育といえは、当然のことながら、辺地での教育、小規模校での教育というだけではなく、先住民の教育を中心的課題としている。差別と偏見を克服し、民族の自立を助ける教育という課題は、アラスカだけのものではなく、民族対立に苦悩する国際社会が21世紀に向けて最も重要なものとする教育課題である。日本の僻地教育の研究実践はともすると、都市の進んでいるとされる教育条件の中での教育に対して、いかにして辺地にあるという悪条件を克服し、都市での教育に遅れをとらないようにするかという限定された視野の中で行なわれていた感が強い。この傾向の背景に、都市に出て行くであろう子供達が、都市の生活に適應出来るようにすることを教育の具体的、現実的目的としていたという、高度経済成長期の辺地の教育状況がある。日本の学校教育、特に都市で展開されている学校教育は、いじめ、登校拒否等に象徴されるように、人間性を培うという教育の基本からみて危機的とも言える深刻な問題を抱えている。この問題は、指摘される偏差値信仰による知識偏重を改めれば事が済むわけではなく、現代都市の効率を絶対視する管理的性格がそのまま学校の性格となっているという構造的な問題であるだけに、問題の解決は容易ではない。なんとかこの管理の枠から抜け出そうとする努力の一つとして、最近、特に野外での体験学習の必要性が強調されている。これなどは正に辺地での小規模校の教育の本質的部分であるが、僻地教育のもつ現代的意義は、それが単に都会の学校での教育に対するアンティテーゼという受身の認識にとどまらず、そこで展開される教育の実践的な活動とその理論化が、学校教育全体の現状を改革する新しい教育創造の指針となり得るという積極的役割をもつという点にある。

僻地教育研究施設は、小規模校を多数抱える北海道の教育に責任をもつ本学にとって要めの研究機関として、着実に研究業績を積み重ねてきているが、特に近年は新しい施設長のもと若い研究員の数も増え、新しく設定された「環太平洋地域の僻地教育」の比較研究のプロジェクトを中心に展開する充実した活動は、本学の研究活動の活性化に大きく貢献するものである。このプロジェクトですでに5名の研究員がシベリア、アラスカでの調査を実施してきているが、この、シベリアのマガダン教育大学、フェアバンクスのアラスカ大学・教育学部そして本学の僻地教育研究施設、三者の僻地教育の比較研究に対しては、平成五年度から三年間の科学研究補助金（国際学術、大学間協定プロジェクト）が交付されることになり研究の一層の発展が期待されている。僻地教育施設が文字通り本学の要めの研究施設であり続けるために、研究員の皆さんの努力はもちろんのこと、全学の熱い支援を心から期待したい。